

<シンポジウム (4)-15-3 >救急場面における神経内科医のプレゼンス

ER 診療における神経内科医の役割の重要性

野村 英樹¹⁾ 大石知瑞子²⁾ 松田 剛明³⁾

(臨床神経 2013;53:1369)

目 的

杏林大学医学部附属病院では、2006年(平成18年)5月より1・2次救急診療チーム(Advanced Triage Team; ATT)が発足し、ER診療をおこなっている。発足当初年間15,266人、2011年は13,414人の救急患者(うち3,432人は救急搬送)の診療をおこない、1,791人の患者が入院となっている。また、ATTの発足と時期を合わせて当院では、脳卒中センター(Stroke Care Unit; SCU)を開設し、神経内科医・脳神経外科医・リハビリテーション医による脳卒中診療チームが結成された。ここでは、ATTおよびSCU開設前後の1・2次救急診療における神経疾患診療の変化について検討した結果を報告する。

方 法

ATT/SCU開設前(2005年6月～11月、I期とする)と開設後(2006年6月～11月、II期とする)の2つの期間における全1・2次救急患者について集計し、動向を比較する。

結 果

I期とII期の総受診患者数は、それぞれ6,297人(1日平均34.6人)、6,747人(1日平均36.9人)であった。疾患分野別に分類すると、腹痛・下痢・腸閉塞などの消化器系症候・疾患がそれぞれ28.8%、29.0%と最多であったが、次いで多かったのがめまい・頭痛・脳卒中などの神経系症候・疾患であり、それぞれ917人(14.6%)、1,061人(15.7%)であった。その内訳は、多い順に動揺性ないし回転性めまい、頭痛、脳卒中、意識障害(失神をふくむ)、筋神経系の愁訴、けいれん、髄膜炎または脳炎、であった。ATT/SCU開設後にtPA投与目的にSCU入院となった患者は15名で、うち7名がATTを受診した患者であり、ホットライン経由は6名であった。

考 察

神経領域の症候・疾患はER診療において15%前後を占め、その対応の質はER診療全体の質に大きく関係している。ERにおける神経疾患に対する診療の質の向上において、神経内科医の果たす役割は大きいものと考えられる。

※本論文に関連し、開示すべきCOI状態にある企業、組織、団体はいずれも有りません。

Abstract

Significant role of neurologists at ER practice

Hideki Nomura, M.D., Ph.D.¹⁾, Chizuko Oishi, M.D.²⁾ and Takeaki Matsuda, M.D., Ph.D.³⁾

¹⁾Department of General Medicine, Kyorin University School of Medicine

²⁾Department of Neurology, Kyorin University School of Medicine

³⁾Department of Emergency Medicine, Kyorin University School of Medicine

(Clin Neurol 2013;53:1369)

¹⁾ 杏林大学医学部総合医療学教室 [〒181-8611 東京都三鷹市新川6-20-2]

²⁾ 杏林大学医学部神経内科学教室

³⁾ 杏林大学医学部救急医学教室

(受付日: 2013年6月1日)